



夏見台幼稚園・保育園 ニュースレター 2022.7.15 号

夏見台幼稚園・保育園でのこだわりをニュースレターにまとめます。どうぞご覧ください。
※配信停止の方はメールでどうぞ(info@treponte.jp まで)

〒273-0866 船橋市夏見台 2-16-1 夏見台幼保園

子どもは憧れに向かって自ずと育つ

かつて、ある小学校の学童保育の先生が夏見台幼稚園・保育園に見学に見えました。その理由とは…

いつも小さな子どもの手を引いて学童に連れてきてくれる児童たちがいます。話を聞くとみんな夏見台幼稚園・保育園の出身でした。どんな保育をしているのか、興味がわいたのです。



学童の先生

自分よりも小さな子どもが困っている、手助けしたい！園での生活がそのまま小学校でも続いていました。私は嬉しくなりました。

異年齢での教育は「主体性」を伸ばします。大人を抜きにした、子ども同士の関わりの中で育まれるものがあります。

年少にとっては、モデルがすぐ近くにいます。ハードルが下がります。行動しやすくなるのです。

異年齢保育

年少 身近なモデルの存在
「意欲」が育まれる

年長 慕われ優しくなる
「思いやり」が育つ

子どもは親の姿をよく観察しています。「お父

さんやお母さんのようにやってみたいけどできない。でも1歳上のあのお兄ちゃんなら、あのお姉ちゃんなら、同じようにできるかもしれない」。そうして一步を踏み出します。

一方の年長。2年前は見上げていたその立場に、今自分がいる。自分は見られている。これは子どものプライドをくすぐるようです。「やってあげたい、自分がむかしやってもらったように」。そうして「思いやり」の心が育ちます。

「意欲」と「思いやり」。これは相反する心の働きです。

意欲：自分がやりたい

思いやり：(人に)やってあげたい

こうした難しい心の働きを、私たちは異年齢という集団の力を使って育もうとしています。

先生が言葉を使って、やさしさを教えることは大事です。そうした「外」からの働きかけとともに、子ども同士の「内」から起こる学び。それが異年齢保育です。外から、大人から強制されたものではない分、主体的な学びとなります。

というのも、教育の本質は次の点にあるからです。

教育の本質

~~親が
教師が
子どもを
育てる~~

子どもは
あこがれに
向かって
おのずと
育つ

「子どもはあこがれに向かって自ずと育つ」。子どもに必要なのはモデルです。「ああなってみよう」という、内側から沸き起こる気持ちが、子どもの成長を促します。

以上のような話を、私は夏見台が開園した15年前からしていました。ところで、初年度の説明会で私は参加していた方から次のような質問を受けました。

「先生のおっしゃることは大変立派です。しかしそのことが本当にできていますか？」

「うっ」と、言葉に詰まってしまいました。ご指摘の通りです。園は始まったばかり。スタッフも新人が多く、異年齢保育がうまく回っていたとはいえません。

何よりも、あこがれとなるべき「モデル」が育っていません。異年齢保育では、よい年長を育てる必要があります。彼らがモデルとなれば、良い流れが続いていくのですが…。

私はその質問をした方に正直に言いました。

「おっしゃるとおりです。まだ私たちの保育は始まったばかりです。一生懸命頑張りますのでただ信じてください、としか言えません」

これは異年齢保育の大きな欠点でもあります。保育自体が難しいのです。

日本で主流の「一斉保育」ならまだ簡単です。マニュアル化できます。ピアノさえできれば、卒業したばかりの先生でも子どもを動かすことができます。しかしそれで子どもの主体性が育めるのでしょうか。

夏見台幼稚園・保育園の初代園長だった南部愛子先生は、長く船橋市の認可保育園で園長をしていました。当時はまだ異年齢保育はなく、一斉保育ばかりでした。毎日ピアノを弾いて子どもたちを保育していました。

そしてある日、ふと思ったのです。



ピアノに合わせて一斉に動く子どもたちを見て、この子どもたちの主体性がきちんと育つか疑問に感じたのです。

南部愛子名誉園長

「上着を脱いでいいですか？」
「先生、次は何をするのですか？」
「先生、次は…」

いちいち確認しなければ動けない子ども。つねに受け身の子ども。意志は育っているのかと疑問に思った、と南部先生は話してくれました。そうして異年齢保育の勉強を始めたといえます。



今では園のあちこちで、年少児にそっと手を貸す年長児の姿が見られます。私が撮影していることに気づくと、得意げにほほ笑む子どももいます。

「なにか人の役に立っている」。こうした実感が、子どもの自己肯定感を育むことになるのだと思います。

(終)